

# 遺跡に学ぶ

特集  
学校の体験学習と見学



# 伊勢崎ふるさと学習と考古資料

宮郷第二小学校 副校長 木村 収

**伊**勢崎ふるさと学習とは、本市の教育構想に平成26年度から位置付けられた学習である。その名が示すとおり「ふるさと」がキーワードとなるが、それは単なる郷土学習や地域学習を指向したものではない。

伊勢崎ふるさと学習の目的は、大きく二つある。一つは、「ふるさと伊勢崎に誇りをもち、伊勢崎から世界に目をむけさせること」であり、もう一つは、「歴史や文化等の教育資源を活用し、地域のよさを学ぶことを通して考え表現する力を育成すること」である。

ここでは、本市「伊勢崎ふるさと学習」と考古資料を素材とした学習とを関連させながら、平成26年度実践した、いくつかの内容について紹介してみたい。

## 縄文土器づくり

**本**校では、毎年6年生が図画工作の時間を使って縄文土器づくりを行っている。おそ

らく、多くの学校で同様の教育活動が行われていると思う。

縄文土器づくりについては、毎年県埋蔵文化財調査事業団（以下 県埋文）に講師をお願いし、7月上旬に実施している。このシステムを多くの学校が利用していると思うが、利用する側にとってメリットが大きいからに他ならないと思っている。それは、講師が映像等を用いて縄文土器について説明をした上で、土器づくりも指導もして下さるからだと思う。かつて自分も県埋文在職時に、学校現場に出かけて土器づくりの講師をしたこともあるが、依頼（学校）側から土器づくりにあたって、その内容について依頼されたことは殆どなかったように思う。

そこで、今回は講師の西田先生に事前に連絡をし、ふるさと学習を念頭に二つのことをお願いした。それは、市内の縄文時代の遺跡について触れていただきたいことと、本市出土の縄文土器を持参して欲しいということである。お願いする際に

伊勢崎市立 宮郷第二小学校 6年生 体験学習資料

平成26年7月4日(金)  
公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 西田 健彦

① 群馬県の歴史年表 「東洋文化財誌本」[平成25年3月群馬県]の4ページ

② 宮郷第二小学校の近くにある遺跡 「マッピングぐんま 遺跡・文化財」

なぜ、宮郷第二小学校の周辺に遺跡がないのでしょうか。

本日持参した波志江中野面遺跡の縄文土器2点

宮郷第二小学校6年生体験学習用資料（西田健彦氏作成）



土器づくりを始める前に縄文時代の講話をする西田先生

は、伊勢崎市と本校のふるさと学習リーフレット等を送付した。

すると、西田先生は「伊勢崎ふるさと学習」の意図を十分に汲み取り、本校用の体験学習資料を用意してくださった。A3両面刷りのものであったが、その学習シートには、学習課題「なぜ、宮郷第二小学校の周辺には遺跡がないのでしょうか」と示されていた。本校は、旧河川に立地するために縄文時代の遺跡はないのだが、学習シートには文化財地図と河川が示されていた。縄文時代の遺跡の立地について、小学校6年生が思考し、理解することは難しい内容であるが、この学習課題は児童にとって新鮮に映ったようである。

また、実際の市内出土の縄文土器を見ることにより、身近な地域にも縄文時代の遺跡があったことにも驚きを覚えた児童が多かった。授業を受けて、その後に土器づくりを行ったが、ともすれば陶芸教室になりそうな内容が、依頼する側の意図を講師に伝えることで、昨年度と比べて随分と児童の意欲や反応も違うと実感した次第である。

授業後の感想にも、縄文時代の遺跡がある場所とない場所に触れたものや、市内出土の土器について書かれたものもあった。

## ■ じせん 耳栓とまが玉づくり

かつて私は、在外教育施設の派遣教員として南米パラグアイ共和国に赴任したことがある。

南米には先住民がまだ多く暮らしており、私は休日を利用して、通訳を同行しながら幾たびか先住民のムラを訪問した。自分が訪問したのは、パラグアイの首都アスンシオンから近い「マカ族」

とよばれる人々が暮らすムラであった。

マカ族のムラを訪問して驚いたのは、彼らが縄文時代の耳栓と呼ばれる耳飾りと同様のものを身に付けていたことである。耳栓とは、耳たぶに穴を開けて埋め込む円柱状の耳飾りで、大きなものは直径数センチにもなる。知識として、世界の先住民の中には縄文人と同様の耳栓を用いている人々がいることは知ってはいたが、現実には耳栓を付けた人に出会えるとは思ってもみなかった。

マカ族のムラを訪問し、いくつかの聞き取りを行ったが、特に耳栓について、その意味や装着方法などを中心に調査を行うことができた。そして、そこで知り得たことを、どのような形で教材として将来の教え子に提供できるかなどと、その頃は考えていた。

日本に帰国後、歴史の学び方の一つとして、縄文時代の耳栓とマカ族の耳飾りについて教材化を試みた。

授業では、縄文時代の遺跡から出土した耳栓を見せた上で、その用途を思考させることから始めている。

今回も、6年生の児童を対象に行ったのだが、県埋文の協力で伊勢崎市内出土の耳栓を借用することができた。6年生には、根拠をはっきりさせて用途を考えて欲しかったので、耳栓の形状などを説明して上で用途を考えさせると、様々な説が出てくる。そこで、「耳栓を装着している土偶（ミミズク型土偶とよばれるもの）」の写真と「耳栓を付けたマカ族の人の写真」を見せて解決を図る。耳栓がどのように使われたかを知る方法として、土偶などの当時の出土品から想像する方法



耳栓を着けたマカ族の友人とともに



伊勢崎市下田遺跡から出土した耳栓

と、現在も似たようなものを身につけている人から想像する方法があることを理解してもらうのである。

用途不明の「もの」は、いくつかの方法で用いられたかわかる。

そこで、次に自分が「伊勢崎ふるさと学習」との関連で教材化を考えたのが「まが玉」である。

「まが玉づくり」は、「縄文土器づくり」とともに、児童が興味・関心をもって歴史学習に取り組むことのできる体験学習として多くの実践がある。本校の6年生も、宿泊行事の折に「まが玉づくり」を行っている。

そこで、耳栓で学んだ「歴史の学び方」を用いて、まが玉がどのように身につけられていたかを、子どもたちに考えさせてみたのである。

まが玉の身につけ方は、周知の通り首飾りや耳飾りが多い。では、実際に装着方法を証明できる方法は何かと問うたのである。

自分が用意したのは、まが玉をつけた埴輪の写真である。そして、まが玉の様々な説などを紹介した。

まが玉について、考えさせたのには、もう一つ理由がある。それは、伊勢崎市の市章が「地域にゆかりの深いまがたまを用いて、いせさきの「い」の字をデザインしたもの」であるからである。本市に学ぶ児童には、ぜひまが玉づくりをするにあたり、自分のふるさと伊勢崎



伊勢崎市の市章

の市章にも理解を深めて欲しかったからである。

今回は、平成26年度に試行した考古資料と関連させた「伊勢崎ふるさと学習」の実践を紹介した。

なかなか児童の思考力を深めたり、考え表現する活動にまで結びつけるには至っていないが、今後も教材化を図っていきたいと考えている。

# 縄文人にタイムスリップ

前橋市立芳賀中学校 田村 公夫

**縄**文時代の授業を進めるにあたり以下の点に留意し行いました。

① 縄文時代はどんな環境であったのか、歴史の教科書だけでなく、地理の教科書の記述にも関連付けて行いました。

② 縄文時代と言えば、縄文土器です。本物の縄文土器を目の前にした生徒たちの予想と実際に手に取った印象から、歴史への興味関心を高めさせるよう行いました。

1万年前、縄文時代の地球は急速に温暖化が進み海面が上昇しました。その結果、日本海が拡大し、さらに対馬海流（暖流）とリマン海流（寒流）が入り込むようになったことで環境の変化がもたらされました。日本海側では冬の雪の量が増え、そして太平洋側では雨が多く降るようになり、温暖で湿潤な気候へと変わっていきました。

現在の環境の基礎が縄文時代にあることは、生徒の関心を大きく引きました。環境の変化によって道具が変化し、そして道具が変化すると時代も変わります。石器時代から縄文時代へ、その変化の象徴と言えるものが土器の誕生です。土器の誕生には、縄文時代の環境と暮らしが深く関わっています。縄文人にとって土器は必需品でした。旧石器時代から縄文時代への移り変わりの中で、人々に大きな生活の変化をもたらしたのは、この土器でした。

土器の登場によって、人々の生活は大きく変化しました。まず、煮る・ゆでるという新しい調理法で食文化が豊かになりました。また、アク抜きが出来るようになり、それまで食べられなかった物が新しく食べられるようになりました。土器に食物を入れて運んだり、貯蔵したりすることも出来る様になり、食器に使うことも出来たと考えられています。

さらに、定住した住居の中央に作り付けの炉を置くという形が定着しました。

歴史の授業において、できるだけ本物に触れさせ、関心・意欲を高めさせたいと考えています。その際、資料は地元のものを用いることに心がけています。

縄文人を感じるために、本物の縄文土器を生徒に見

せ、触れさせました。土器は、学校区から出土した資料を使うことが、より身近に感じられます。また、比較資料として、他の時代の土器を用意しました。なお、触れさせる際には「国民共有の財産である。」ことを十二分に伝える必要があります。

前橋市立芳賀中学校周辺は、赤城山南面の斜面に位置し、赤城山の湧水地もあり、旧石器時代からの遺跡の宝庫です。周辺では団地造成や上武道路建設に伴う発掘調査が行われ、多くの遺物が出土しています。

そこで、群馬県埋蔵文化財調査事業団より、本地域出土の土器を借り授業を行いました。

借用した土器は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器です。それぞれの土器の説明を教科書では次のように記載しています。縄文土器は『厚手で、低温で焼かれたため黒褐色をしたその土器は、表面に縄目のような文様がつけられていることが多い』、弥生土器『やや高温で焼かれたため赤褐色をした、薄手でかための土器』、須恵器『高温で焼く、かたく黒っぽい土器。渡来人が伝えた新しいかまは、高い温度が出せたので、かたい土器ができました。』とありますが、生徒たちは当地域出土土器をどのように感じるか興味深いところでした。

## 縄文土器の特徴について確認する

**実**際の活動では、特徴を比較しやすいように、縄文土器をもったあとに、他の土器を持たせました。生徒の感想は以下のとおりです。

■縄文土器は、大きく茶色で、表面は縄目でゴツゴツしているが、内面は意外とスベスベしている。土の厚みは他の土器より厚い。持った感想は重いが思っていたより軽い。

■弥生土器は、小さく、こげ茶色、表面には竹ぐしで付けたような波線がたくさんある。縄文土器より薄く、軽い。

■土師器は、赤茶色で表面は磨いたときのキズのようなものが見られる、内面はスベスベしている。手づくり感があり、底が丸くて転がりそう。とても軽い。

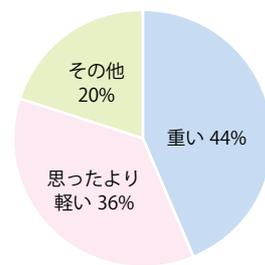
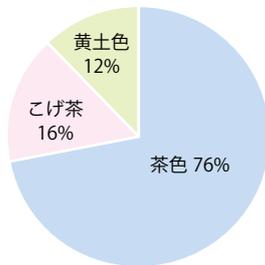
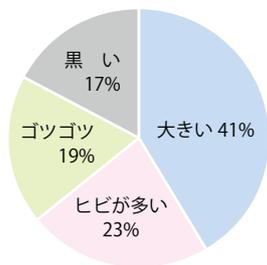
■須恵器は、灰色でコンクリートのように見えるが軽い。横線があり、取っ手がついている。中にタールが固まっている。

すべての生徒が、その重さや質感を体感しました。他の土器との比較を通して、縄文土器の特徴を実感できたと思われます。

実物資料を用いることで、写真や文章から読み取ることのできない特徴（重さや肌触り、色やつやなど）を感じることができ、古代の人々の知恵や暮らしについて具体的に考えることができました。また、実物の土器を持つことで、歴史的事象への興味と文化財の大切さについて学ぶこともできました。

本資料は、1 学年春の授業参観で使用したものです。授業では、保護者にも手に持ってもらいました。最後に、歴史は暗記するだけではダメで、何かを推理していく事がとても大事です。歴史の楽しさは「本当は歴史というのは分かっていないことが多い。それをどう推理していくか。原因と結果から推理する」という事が楽しいですと、まとめました。

家庭では、本日の授業で使用した土器や地域の話がなされたようです。地元の本物資料は、家庭での話題づくりに有効であり、家族で地域を考える良い機会にもなりました。



『土器を観察する』より各感想の集計をグラフ化

土器を観察する		1 年 組 参 氏 名		平成 26 年 7 月 10 日	
縄文土器 深鉢 (芳賀東部団地遺跡 出土)	見た感想 大きい。黄色。ほい茶色。底がない。 なぞが黒、ほいシミのような所がある。 すす さわった・持った感想 とてもざらざら。→ 縄のあと 思っていたより重い。 内側はけっこうつる。	文様・形の特徴 縄の文様がついている。 下が細く上が広い。あまひろがついてない。	土師器 椀 (芳賀東部団地遺跡 出土)	見た感想 現在のおわんの原形のような。 底は不安定でぐらぐらしている。 内側に黒っぽくなっている所がある。みがいたあと さわった・持った感想 洗ったときのすすがついた。	大きさ高さ 4.7 cm 色 赤茶色 とても軽い。(須恵器よりも軽い) 須恵器ほどではないが、ざらざらしている。
縄文土器 壺 (富田宮下遺跡 出土)	見た感想 須恵器よりも黒い。 うまい。 さわった・持った感想 軽い。 内側はすべすべ。外側はもよがな所は けっこうすべすべしている。	文様・形の特徴 細い線がたくさんついている。つぼの形 竹くしや竹やうでつけたもよう。	須恵器 高坏 (芳賀東部団地遺跡 出土)	見た感想 もよがりあり、取っ手が足踏たいなのがついている。 黒、ほい。 さわった・持った感想 ざらざらしていて、思ったよりも軽い。 かたい。 木からでた タールが内側に固まっている。	大きさ高さ 10.7 cm 色 黒、ほい。内側には黄色、 ほい土がついている。 波のようなもよう。足のような台(写真の○) ↑取っ手がついている → 繋りのためのものだから?

底が平ら 黒い、つぼの形でく木がある他の物とは違う、カクカクしたもよう。  
うまい。かたい、ざらざら(もよう) 土におい  
波とジグザグの竹くし、竹やうもよう。

みんなの意見

ワークシート『土器を観察する』の提出

# 発掘情報館で体験学習！

前橋市立原小学校教諭 遠藤 俊爾

## 発掘情報館で体験学習

**本**校では、例年6年生の社会科見学として、群馬県埋蔵文化財調査センターにおいて体験学習や発掘情報館の見学を行っている。

26年度も、5月27日の午前中に、2クラス75名で「火起こし」体験と、発掘情報館の見学を実施した。午後は、高崎市にある県立歴史博物館と綿貫観音山古墳の石室内部の見学する行程である。

「火起こし」体験では、担当者から説明を聞いたり、お手本を見せてもらったりした後、5～6名のグループになって「マイギリ」に挑戦することになった。



写真1 火起こしの道具と体験の様子

「マイギリ」の道具は、写真1にあるように、棒を中央に穴の開いた板に通し、その下にはずみ車をつけて、棒と板を紐で結んだ物である。その棒の先端を「火切り臼」と呼ばれる板に、押しつけるのである。火切り臼には、くぼみの一部分に切り込みが入れてあり、そこから木くずと共に火種がこぼれ落ちる仕組みになっている。棒と板を結んだ紐が、板の上下動により巻きつけられ、それをリズムカルにくり返すことによって回転を継続する「火起こし」方法である。「マイギリ」は江戸時代に伊勢神宮において、儀式を行うために始まったとされ、木と木の摩擦によって発火させる方法であり、小学生でもコツをつかむと火を起

こすことができる。

最初は、力まかせに横の板を押しつけ、臼と棒がなかなかかみ合わずにずれてしまったり、回転せずにすぐに止まったりと悪戦苦闘していた。しかし、テンポ良く板を押し下げることや、下の板をしっかりと押さえることなど担当者や補助員さんの助言により、徐々に回転数が多くなり、煙が立ち上るようになってきた。押さえつける時にはやや力を入れ、反動で戻った時に力を抜いて上下動を継続させることがコツである。

また、木くずが出始めてからは、それを絶やさないように、グループ内で交代しながら協力して、火種ができるまで頑張っていた。

最後は、火口に移して、息を吹きかけ炎が上がれば完了である。(写真2)全グループが、煙を上げることはできたが、火種が十分にできる前に移してしまったり、息を強く吹きかけすぎたりして、火を付けるまでに至ったグループは、残念ながら半数程度であった。



写真2 火種を火口に移した様子

一度火を起こすことができたグループは、その後何度も火を起こすことができた。(写真3)

「上下に動かす仕組みになっていて、すごく体力が必要でした。私は、火をつけることはできませんでしたが、けむりが出るところまでいったのでうれしかったです。」「火を起こすのには、リズム感が必要なので、火を起かせた時は良かったです。昔の人は、火を起こすことも大変だったと思

いました。」「初めに、火起こし体験をしました。木を上下に動かす仕組みになっていて、すごく力が入りました。私は、実際に火を付けることはできませんでしたが、何度も挑戦しているうちにけむりが出るところまでいったのでうれしかったです。上手な友達は、二回くらい火を付けることができ、すごかったです。」

今では、ライターやマッチで一瞬にして火を付けることができるが、火を起こすことの大変さや火のありがたみを実感することができたようである。もっとも、そのマッチでさえ「昔の道具」に感じている児童もあり、その使い方を指導しなければならないようになりつつある。

また、何人かの児童は、棒と火切り臼だけで火を起こす「キリモミ」にも挑戦したが、残念ながら火を起こすには至らなかった。



写真3 火が起きた様子

## 発掘情報館の見学

発掘情報館の見学では、平成24年に金井東裏遺跡で発掘された「甲を着た古墳人」のレプリカの前で、発掘された様子や群馬県古墳時代についてわかりやすく解説していただいた。(写真4)

新聞等でニュースになっていたことから子どもたちもとても興味深く話に聞き入っていた。

「甲を着た人が、榛名山のふん火にうもれていたことを知り、びっくりしました。」

また、国指定重要文化財の「房谷戸遺跡」の縄文土器をはじめ、神保下條遺跡の埴輪など県内出土の実物を直接目にするすることで、古代の人々のくらしぶりを実感することができたさらに、石斧や鏡のレプリカを手にして、その重さや鏡面の輝きを確認することもでき、教科書や資料集だけでは

得られない経験をすることができた。

「はにわやお面などを見て、昔の人は神様などを深く信じていたのだと思いました。」



写真4 発掘情報館での解説

次に、収蔵展示室では旧石器時代から江戸時代に至る遺物が展示されており、各時代の石器や土器、装飾品等が時代順に並べられ、それぞれの違いに気づくことができた。

「はにわには、人や馬だけでなくいろいろな形がありおもしろかったです。」「館内には、土器やお皿などが置いてあり、古代から江戸時代くらいまでのお皿が時代の順に並んでいました。とても歴史を感じることができました。」

今回行った「火起こし」体験については、材料の実費がかかるが、発掘情報館の見学は無料である。他にも、「土器づくり」や「勾玉づくり」など実費負担とはなるが、多くの体験活動ができるように用意されている。夏休みの自由研究に利用することや、学年行事あるいはPTA主催の親子行事への講師派遣などにも対応しており、様々な連携の仕方が考えられる。

もちろん、授業でも社会科の歴史の学習だけでなく、図画工作科で「土器づくり」や「埴輪のスケッチ」を取り入れたり、総合的な学習の時間に地域の歴史を考えたりする場合などにもいろいろな助言が得られる。

「文化財」の本物と触れ合える、あるいは考古学や歴史学の専門家の話を直接聞いたり、質問したりできる身近な機会として、埋蔵文化財センターをこれからも積極的に活用していきたいと考えている。

# 保護者参加型の授業づくり ～ 縄文土器作りを通して ～

高崎市立塚沢小学校 原 佳子

## 1. はじめに

10年ほど前のことです。箕郷町立箕輪小学校（現高崎市立箕輪小学校）に勤務していた頃、6年生の担任をしたことがあります。箕輪小では、各学年一回ずつ、子どもと保護者が一緒に参加する「学年PTA行事」が行われます。毎年、保護者の代表である学級委員と担任が共同で企画していました。保護者からは、「何か親子一緒に楽しめる体験教室を。」とのことでした。

そこで、「縄文土器づくりはどうでしょう。」と提案してみました。私も事業団勤務時代に、小学校への出前授業で、縄文土器づくり指導の経験がありました。また、保護者の委員の中には、陶芸を教えた経験のある方もいて、話は一気にまとまりました。

## 2. 縄文土器と子どもたちの出会い

行事の企画に先立った4月のある日。私は、一つのパンケースを教室に持ち込みました。

「先生、その箱ななに。なにが入っているの？」子どもたちは興味津々です。

小学校の社会科では、6年生になると本格的に歴史の学習に取り組みます。歴史学習の楽しさを知るには本物が一番！と、縄文土器を箕郷町教育委員会（現高崎市教育委員会）からお借りしました。土器はすべて町内からの出土品。復元してあるものだけでなく、破片などで、触ってもよいものもお借りしました。

「今のお茶碗と比べるとずいぶん厚いね。」「綺麗な模様だね。」「でも、模様がみんな違うよ。」「砂が混じっているのかな。ざらざらするよ。」本物に興奮し、嬉しそうに観察結果を述べ合う子どもたちを見て、本物の持つ力の大きさを改めて実感しました。

「この行事も本物の縄文時代の土器づくりに近い体験にしたい。」と考え、埋蔵文化財調査事業

団に相談しました。「それなら、土器作りだけでなく、作った土器を野焼きしてはどうでしょう。」とのアドバイスを受けました。そして、以下のような手順で、体験活動を実施しました。

## 3. 活動の概要

子どもたちに活動の見通しをもたせるため、まず活動の概要について説明しました。また、保護者にも活動について知ってもらうため、学級だよりなどで、社会科の授業の様子や学年PTA行事への準備の様子などもこまめに知らせました。

授業は、以下の5段階で行いました。

### 全9時間計画（総合的な学習の時間を配当）

- ①粘土作り（2時間）
- ②設計図づくり（1時間）
- ③土器の形作り（2時間）
- ④野焼き（3時間）
- ⑤振り返り（1時間）

※（〇時間）とあるのは、授業に要した時間。1時間＝45分間

### ①粘土作り 9月30日

この日は、活動の初日にあたるため、活動に入る前に、活動の概要について説明しました。

土器作りの多くは、教材用の素焼き粘土をそのまま使いますが、今回は野焼きをするため、川砂を混ぜることになりました。これは、野焼きにも絶えられる土器にするための工夫です。また、粘土に砂をなじませるためには、2週間程度「粘土をねかせる」必要があるということで、土器の形作り15日前のこの日に「粘土作り」を行いました。

粘土を捏ね、砂を均一にする作業は、力も根気も必要で子どもたちには大変な作業でした。それでも、野焼きにも絶えられる土器にするためには必要な作業であることを話すと、みんな一生懸命頑張っていました。砂を混ぜた粘土は、丸めて「粘土玉」にし、ビニール袋で乾かないようにして、

ねかせました。「(粘土作りは)縄文時代の人たちも大変だったんだろうね。」「早く土器にしてみたいな。」と、土器の形作りへの期待も高まった様子でした。



粘土に混ぜる川砂

### ②設計図作り 10月8日

土器の形作りの1週間前、自分は何のような土器を作りたいか考えて、設計図に書きました。

最初に「縄文人は、願いを込めて、あのようになくさんの飾りの付いた土器を作ったと考えられているのだよ。」と縄文土器の装飾について話しました。その上で「何のために作るか(用途)」「どんな祈りをこめるか。」の2つを考えて、「作りたい土器を絵にしてみよう。」と投げかけました。

子どもたちは、早速土器について考えワークシートに記入を始めました。「犬のえさ入れを作る」と書いた子は、「犬が長生きするように願いを込める。」と書きました。「貯金箱を作る」と書いた子は、お金がたくさん貯まるように、(お金を押し型にして)お金で文様をつけるの。」と話していました。

設計図を書くことは、子どもたちが土器の形作りにすぐ取り組めるだけでなく、指導する側も子どもたちがイメージしている形を捉えることができるので、有効な手だてと感じました。この設計図を家庭に持ち帰らせることで、保護者にも子どもたちの作りたいものが伝わり、土器の形作りの際に役立ちました。

### ③土器の形づくり 10月15日

いよいよ土器の形作りです。前述の「学年PTA行事」当日あたり、保護者が子どもたちと一緒に



土器づくりの際に事業団で配布されるリーフレット

に形作りを行いました。多く的人数が一堂に会するため、会場は体育館を使用しました。

この日は、事業団から桜岡正信さんにおいでいただきました。最初に「縄文時代や縄文土器について」お話しをしていただきました。次に、作り方の説明です。そして、いよいよ、土器作りが始まりました。

土器は、粘土を紐状に伸ばし、それを積み上げていく作り方で作ります。積み上げた輪の間を丁寧に消し、形作りが済むと文様を付けます。文様は、事業団で用意していただいた縄文を燃ったものや各自で用意した粘土ペラなどを使用しました。もちろん、前述の子は、小銭を使っていました。縄文土器の形作りは、丁寧に仕上げると授業時間で、4時間くらいかかりますが、親子で協力し合い仕上げたので、ほぼ全員が2時間で仕上がりました。これには、設計図の存在が役立ちました。家庭でも、設計図について話し合っていたので、保護者も子どもたちのイメージが掴みやすく作業がスムーズに進んだ様子でした。

「お母さんが粘土の紐を作るから、あなたが積



縄文原体や竹管・貝殻。粘土に転がすと文様が着く

み上げて形を作ってね。」「その模様は、なかなかいいね。」などどの子も保護者と相談しながら楽しそうに作業していました。

できあがった土器は、冬季は使わないプールの更衣室を利用して乾燥させ、野焼きを待ちました。

#### ④野焼き 12月4日

野焼きに使う落ち葉は、校庭や学校の裏山で子どもたちが集めました。薪は保護者の方に寄付していただきました。多くの場所が必要ない野焼きなので、校庭で行いました。

この日も、事業団から桜岡さんをお迎えしました。野焼きの方法、火起こしの方法などについて説明していただいた後、作業に入りました。

まず、平らな薪を1m四方に敷き詰めて、その上に乾燥した土器を並べました。土器を覆うように薪を積み上げ、その上を枯れ葉で覆って準備完了です。クラスごとに、火起こし具で付けた火を点火しました。

この日は、一日学習参観日にあたり、多くの保護者が野焼きの見学に訪れました。「土器が真っ赤に燃え上がりきれいですね。」「育成会の活動に取り入れてみたいですね。」子どもたちよりも熱心に野焼きに見入る保護者も少なくありませんでした。

火起こし体験をしたり、火に包まれる土器の様子を観察したりして、待つこと約1時間半。すべての薪が燃え尽きて土器が焼き上がりました。ほとんどの土器が割れることなく、誕生しました。

#### ⑤振り返り 12月10日

それぞれが、作った土器と記念写真を撮ったり、これまでの活動をレポートにまとめたりしました。子どもたちの反応は実に様々でしたが、「縄文人は大変だったと思う。それだけに土器を大切に使ったのではないか。」「縄文土器がこんな風に作られていたことがわかった。」など体験したからこそその感想が多くありました。また、感想を見た保護者からは、「とてもよい体験だった。物を大切に作る心が育ったように思う。」「物作りの大変さ、楽しさを味わえる。子どもたちにより体験をさせてもらった。」などの意見が寄せられました。

## 4. 縄文土器作りを終えて

「子どもたちと何か一つの物を長い時間をかけて、一緒に作る体験は、普段なかなかないので、よい体験だった。」「子どもがどのような物を作りたいか。どうして作りたいか、など話し合うことで、子どもとゆっくり話す機会が得られてよかった。」「子どもが考えたり、作ったりする姿に、子どもの成長を感じることができた。」などの感想が保護者から寄せられました。

保護者も楽しんで参加できる授業の一つとして、このような体験学習も一つの方法ではないかと感じました。

## 5. おわりに

現在、私が勤務する塚沢小学校は、地域との連携が密な学校です。また、市街地に立地するため、保護者が両親とも働いている家庭も少なくありません。

この事例では、薪の確保や陶芸の経験者などを保護者に協力を得ましたが、地域の方にこのような協力も得やすい環境と考えられます。地域参加型の縄文土器作りという授業もこれからの方向性の一つなのではと思われました。

◆古代の家の火どころとして、古墳時代から使われてきたかまど。『置きかまど』という特別な形に込められた古代人の心を展示します。

### 【展示期間】

期 間：5月24日（日）～9月6日（日）  
午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）  
土曜日・祝日は休館

### 【講演会】

期 日：6月28日（日）午後1時～午後3時  
演 題：『置きかまどに込められた古代人の心』  
講 師：神谷 佳明（当事業団職員）  
定 員：100人（先着順）  
会 場：群馬県埋蔵文化財調査センター発掘情報館  
費 用：無 料  
申し込み：不 要（当日直接会場にお越し下さい）  
問い合わせ：（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課  
電 話：0279-52-2513

## メールによる行事案内のお知らせ

◆当事業団では年間を通じて展示会や講演会など様々な行事を催しています。メールによるこれらの案内をご希望の方は、下記のアドレスよりお申し込み下さい。

なお、受付の事務処理上、件名は『行事案内希望』とし、あわせて本文に『住所・氏名・電話番号』をご連絡下さい。

◆メールアドレス：gunmaifukyu@apricot.ocn.ne.jp

◆QRコード



※携帯電話のメールアドレスへ連絡をご希望の方はパソコンからの着信ができるように設定して下さい

### 『遺跡に学ぶ』第39号

平成27年5月25日発行  
公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 渋川市北橘町下箱田784-2  
電話番号 0279-52-2513（普及課直通）

■本誌は、学校および教職関係者向けの埋蔵文化財情報誌です。学校の授業等で誌内の文章・写真・図面をコピー利用する場合は著作権フリーです。それ以外でのコピー利用は禁止します。  
■ご意見・ご質問は上記あてに連絡をお願いします。



火起こし体験風景